

文部科学大臣奨励賞

「心の故郷」

ビシャール バルマ

Mr. Vishal VARMA

(インド・英語教師 (ALT)・美杉中学校)

アメリカの大学を卒業後、三重 YMCA の英語教師として来日した。その後新潟県の大学院に進学し国際関係を専攻。現在は三重県内の中学校で英語教師と文化部の顧問をしている。



日本の有名なことわざに“かわいい子には旅をさせよ”というのがあります。私は旅が大好きです。高校卒業後、アメリカへ留学することを決めました。親は反対しましたが、4年間でいいからとお願いして、行かせてもらいました。しかし、旅は4年間で終わりませんでした。生まれた国を離れて、もう18年目です。

現在9年間続けて日本に住んでいます。一番長く住んでいるのは三重県にある、美杉村、というところです。人口はたった7700人。この小さな村の小さな学校で本当にかわいらしい子供達に英語を教えています。

友人から“なんでこんな不便なところに住むの？”とよく言われます。銀行がない、コンビニもない、本屋もない、電車は2時間に1本。しかも最終は夜7時。やっぱりどう考えても、不便！

しかし、自然や村民の優しさに恵まれた、こんな素晴らしい場所に住めて、本当に幸せです。知らない人も挨拶をしてくれます。隣のおじさんが自分の家の回りの草を刈る時に、私の家の周りの草も刈ってくれます。風邪を引いたことが分かったら、隣のおばさんが薬を煎じてくれます。突然、知人が野菜や新茶を何も言わずに家の前においていってくれることもあります。

このような様子を2年前母がインドから来た時に見て、驚きました。“どうしてみんないつも食べ物をもってくるの？私たちが困っていると思われていないでしょうね？”母が聞きました。インドでも近所の人におすそわけする習慣があるのですが、料理した食べ物を近所に配るのが習慣です。生野菜やお米をあげることはないので母が驚いたのです。

私の趣味は料理をすることです。よく休みの日にカレーを作ります。ちょっと自慢だけど、学校の子供達を始め、村の人々も食べてくれます。しばらくカレーを作らないと“おいビシャール、カレーを持ってこい！”ぶっきらぼうだけど、親しみを込めて近所のおばさんが言ってくれます。

美杉村の人々はいつも日本語で話しかけてくれます。逆に都会へ行くと、“あの。。Japanese オーケー？”知らない人が聞きます。ええ。なんで聞くの、と考えてしまいます。ああそうか、顔は外国人の顔ですから！私が日本を話せるのを、分からないのですね。

私は日本語をずっと勉強し続けています。それに美杉語も勉強しています。美杉語の先生は中学校の生徒達です。例を挙げます。“あばばい”っていう単語をご存じですか？それはまぶしいという意味です。“あばばい”をいう時にジェスチャーもしないとだめですよ！-“あばばい”信じられなかったらー

回美杉村へきて試してみてください。

数か月前に、中学生のご両親から“ずっと美杉村にいて下さい”といわれました。とても嬉しかったです。人は外国人だろうが、日本人だろうが、世界中、人は人として認められようと努力しています。いいえ、認めてもらいたいと願っています。私は美杉村の子供達、そして村民の皆さんに認めてもらいました。故郷との関係は故郷の土地との関係ではありません。その故郷の人々との関係にあります。国際化が進み、在日外国人も増加しています。外国人が日本の小さな村を自分の故郷と呼んでも不思議なことではないと思っています。

私は今も、時々旅をしています。旅行をするのは好きですが、美杉村に帰るのはもっと好きです。生まれた故郷は遠い存在になってしまいましたが、そのかわりに美杉村が私にとって、かけがえのない場所となりました。心の故郷を見付けることができ、私は運がよかったと思っています。来年、美杉村は合併してしまいます。合併しても人々の優しさはなくならないと信じています。

私の心の故郷は一生私の心に残ると思います。